

壮年期世代のペット喪失感情について (1) —飼い主の語りの探索的分析 回顧を中心に—

Feelings associated with losing a pet by adults (1) :
— Exploratory analysis of pet owners' retrospective narratives —

松田光恵^{*}
Mitsue MATSUDA

Abstract

Correlations between adulthood and the loss of a pet, which is a type of object loss, were examined. The primary developmental tasks in adulthood include developing the next generation and handing over one's identity. Interviews were conducted to examine the psychological processes of losing one's pet in adulthood, in which the central developmental task is generativity. The results indicated that participants played the main role in the relationships with their pet, such as taking care of the pet. They compared the relationship between themselves and their pet to a parent-child relationship and involved themselves with their pet as if they were taking care of a child. They also considered that taking care of a pet was similar to raising a child. They recognized the pet as their child, which might be an expression of their position and role of generativity, which is one of the characteristics of adulthood. They perceived their pet as an existence that calmed their feelings, brightening up the mood of their family, and gave a chance for communication, which could be why many people thought that "a pet is a family member." It might be possible to clarify the state of current Japanese families by investigating internal relationships between people and their pets. It is suggested that such peripheral but fundamental studies would be required in the future.

キーワード：ペット、ペットロス、対象喪失、悲嘆の過程、モーニングプロセス、ライフサイクル

I. 問題

愛情や依存の対象を失う体験は対象喪失 (object loss) と言われており (小此木, 1979)、その意味する範囲は広い。例えば我々は死によって、または生き別れによって、愛する家族、伴侶、友人を失う経験をする。また離別、失恋、裏切り、子どもの自立、地位や名誉の喪失、退職、転勤、所有物の紛失、ペットを失う、転居、転校、卒業、病気による身体の切除、等といった事象も対象喪失にあたる。喪失の対象は人に限らず (高木, 2007)、これらが示すのは対象喪失の意味する範囲の広さ、そして分野が多岐に渡るということであろう。

では、喪失とはどのような視点で捉えればよいのだろうか。池内ら (2001) は、我々が体験する喪失とはどのようなものであるかについて、①喪失形態 (どのような形態の喪失であるか) ②喪失状況 (どのような状況で喪失したか) ③喪失対象 (喪失した対象は何か)、の3視点の分類が可能であるとした。それら喪失視点の3分類、またはその内容を表にまとめたものが表1である (表_1参照)。

^{*}くらしき作陽大学子ども教育学部
Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

表_1 喪失視点の分類 (池内ら, 2001 より作成)

分類	基準	意味	文献
喪失形態	再生可能な喪失	回復可能な喪失形態(一時的な破壊など)	Miller & Omarzu (1998)
	再生不可能な喪失	死は決して回復することのできない唯一の喪失形態	
	物理的喪失	何か有形の物が役に立たなくなる(例:配偶者の死)	Rando(1988)
	象徴的喪失	社会的相互作用の中での抽象的な変化(例:地位の喪失)	
	意識的な対象喪失	対象を失う意識的な体験	森(1990)
	無意識的な対象喪失	理由の分からない意識されない心の落ち込み体験など	
	内的対象喪失	その人の心の中だけで起こる喪失	小此木(1979)
	外的対象喪失	心の外にある対象が実際に失われる喪失	
喪失状況	自発的喪失	自分自身が意図的に起こした喪失	Belk(1988)
	非自発的喪失	意図せずして生じた喪失	
	自分が引き起こした喪失	恋人をふったなど	小此木(1979)
	強いられた喪失	恋人にふられたなど	
喪失対象	親密感や一体感を抱いていた人物の喪失	肉親の死別や離別、失恋など	森(1990, 1993)
	可愛がっていた動物や使いなじんでいた物の喪失	ペットロス、物的所有物の紛失	
	慣れ親しんだ環境の喪失	引っ越し、卒業など	
	身体の一部の喪失	手足の切断、失明など	
	目標や自分の描くイメージの喪失	自己イメージが崩れる碎かれる場合、自己の内的対象の喪失、他人には気づき難い	小此木(1979, 1997)
	近親者の死や失恋、愛情・依存の対象の喪失	子の親離れの過程、そのことによる父母側の子どもを失う体験も含む	
	住み慣れた環境や地位、役割、故郷などからの別れ	親しい一体感を持った人物を失ったり、自己を支えていた環境を失う	
	自己を失う体験、自己を一体化させていた国家や理想の喪失	自己を一体化させていた理想、グループを失う場合、深刻な対象喪失の体験が起こる	

このように、喪失を考える際にはその形態、状況、対象そのもの、といった多角的な視点が存在する。本研究では、親しみや愛着を持った事物、事象を失う際の喪失対象に視点を絞り、論じることとする。

悲哀の過程について

愛する対象を喪う経験をした場合、我々の心はほぼ一様に悲しみの情動を経験し、その後様々な心理状況に陥る。心の中ではまず失った対象への思慕が起こり、再会を望む、悲嘆、絶望、怒り、悔いや償いの気持ち、など一連の心理過程が生じる。この対象喪失により起こる心理過程はmourning work (喪の仕事) またはmourning process (悲哀の過程) と呼ばれ、この過程で経験される落胆や絶望の情緒体験はgrief (悲嘆) と呼ばれている (小此木, 1979)。その2つの語を整理すると、mourning work (喪の仕事) とは、「喪失体験に伴う辛い感情を消化し、その経験に適応していくための心理・社会的な対処作業」を意味しており、mourning process (悲哀の過程) とは「残された人が喪の仕事を行うことで少しずつ悲しみを消化し、大切な人がいない世界に適応していく。その適応への全過程のこと」とされている (山本, 2014)

mourningの概念を最初にうち立てたのはFreud (1970) であった。その後Bowlby (1982) が母子と乳幼児間の愛着対象喪失の研究を打ち出し、その結果対象喪失に引き続いて起こるmourningは①情緒危機の段階②抗議-保持の段階③断念-絶望④離脱-再建の4段階ある、とした。また、ターミナルケアの臨床研究で有名な精神分析学者のE・キューブラー・ロス (1998) は、死に直面した人の心理状況を研究、分析し、その心理過程とは①否認②怒り③取引④抑うつ⑤受容の5段階を経るとした。これは先のBowlbyの結果に、取引、受容の段階を加えたものである。さらにDeeken (2003) はキューブラー・ロスの心理過程を発展させ、悲嘆のプロセスとして①精神的打撃と麻痺状態②否認③パニック④怒りと不当感⑤敵意とうらみ⑥罪意識⑦空想形成、幻想⑧孤独感と抑鬱⑨精神的混乱とアパシー (無関心) ⑩あきらめ-受容⑪新しい希望-ユーモアと笑いの再発見⑫立ち直りの段階-新し

いアイデンティティの誕生、の12段階があるとした。キューブラー・ロスの5段階の心理過程は“死を告知された患者本人の心理分析”だったのに対し、Deekenの悲嘆のプロセスは“遺された人が悲嘆から立ち直るためのモデル”である。Deekenの12段階の悲哀の過程からは、立ち直り心の傷が癒える様分かる。しかしDeekenは心身ともに健康な状態に戻ることに意味があるのではなく、これらの過程を通過し人格的に大きな成長を遂げることに意味があるとした。この指摘は大変意義深い(平山, 1997)。

II. 目的

小此木(1997)は対象喪失には内的対象喪失と外的対象喪失があるとした。外的対象喪失とは自分の心の外にある人物や環境が実際に失われる経験のことを言う。例えば、近親者の死、失恋、転勤、引越などである。対して内的対象喪失とは、内面的なその人物の心の中だけで起こる対象喪失である。例えば父親や母親像といったイメージの喪失などがそれにあたる。幼いころから持っていたイメージ(立派な父親、良妻賢母な母親)が思春期の反発から、親に対する幻滅体験に変わり深刻な対象喪失を引き起こすなどがそれにあたる。また山本(2014)は、外的喪失と内的喪失は時に乖離するということを、具体例をあげ説明している。ある女性が夫の浮気から失意や幻滅などの内的喪失が繰り返され、その結果、離婚届けを出すことは外的喪失にあたるが、その後、その女性が悲しむどころか開放感を味わうこともある、とし外的喪失と内的喪失は必ずしも一致しない、と述べている。

小此木(1997)は、mourning processは簡単に終わってしまうプロセスではなく、人は人生の中で幾多の対象喪失を経験し、それに伴うmourningの流れがあるので、必然的に複雑であるとした。また人生の各段階で繰り返し行われるものであり、それゆえ成熟し、深みを増していくと述べている。このように人格形成の意味でも、ライフサイクルの各段階におけるモーニングという視点が重要だということだ。

最愛のペットを喪うこと、いわゆるペットロスとは内的対象喪失と外的対象喪失のどちらにも当てはまる。これらに関する知見は徐々に蓄積しつつあるが未だ十分であるとはいえない。例えば、幼児期の死の概念とペットロス経験の関連を研究した論文(濱野,2008)、青年期のペットロス体験の研究(朝比奈, 2002)、高齢者のペットロス経験の調査(安藤, 2015)など、ある特定の世代とペットロスの関連を見受けられるが、今後さらなる研究が望まれる。

そこで本研究では壮年期とペットロスとの関連に注目したい。壮年期、いわゆる中高年の心の危機を扱った有名な研究には、対象喪失による残された配偶者の発病や死に関する研究、中高年における対象喪失と癌の研究などがある(小此木, 1997)。ライフサイクルが示すところの壮年期の主要課題は、社会と子どもたちのために尽くすことであり、自分のためだけに生きるのではなく、次世代を育て、自らのアイデンティティを受け渡すことにある(山本, 2014)。世代育成能力を課題とする壮年期に最愛のペットを喪う経験をするとは、どのような意味があり、いかなる心理過程を経るのだろうか。

本研究の目的は、壮年期世代がペットロスといった対象喪失体験をした場合の心理的過程を質的・探索的に分析するものである。ペットを失った壮年期の人を対象にインタビュー調査をし、愛するペットの生まれてから死ぬまでの歴史を辿り、その喪失体験をどのように受け止め、解釈し、現在に至るのかについて調査を行う。

III. 方法

1. インタビュー協力者

本研究のインタビュー協力者は、いずれもペットを喪失した経験を持つ男女9名(男性2名、女性7名)、経歴は主婦、サラリーマン、webデザイナーなど様々であり、平均年齢は46.9歳であった。喪失したペットの種類の内訳は犬8頭、猫1頭であった。

2. 手続き

インタビュー前に、研究の趣旨と倫理を説明し、インタビュー途中での中断や辞退も可能である旨を説明した。知り得た情報は本研究以外では使用せず、匿名で扱うことを説明した上で協力賛同の意思を確認した。その後、筆者と各協力者1対1で、静かなカフェなどの場を選び、和やかにインタビューを行った。所要時間は概ね45分～1時間程度とし、質問項目に沿いインタビューをすすめた。インタビュー内容の質といった点から、感情が高ぶり、涙があふれる場面も想像されたため、なるべくリラックスして素直に話ができるような状況づくりを心がけた。録音機器使用の許可をいただき、インタビュー後逐語録を作成し、プリントアウトした後、プライバシー保護の観点から録音は消去することを約束し実行した。

3. 質問項目

質問項目は全部で23項目である。被験者の属性を尋ね、〈1. 回顧〉〈2. ペットとの関係〉〈3. 死因・喪失前後の感情〉〈4. モーニング可能な条件〉〈5. 喪失後の感情〉〈6. 未来について〉の6概念で質問を構成した。実際の質問内容は朝比奈(2002)を参考にし、独自に作成したものを用いた。以下、その質問項目を記す。

Q1. 性別、Q2. 年齢

〈1. 回顧〉

Q3. ペットの生存期間、Q4. 死後から回想時までの期間、Q5. 他のペットの有無、Q6. 飼い始めるきっかけ、Q7. それまでの飼育経験、Q8. 世話における関わり、Q9. ペットのキャラクター把握

〈2. ペットとの関係〉

Q10. ペットの役割、Q11. 家族にとってのペットの位置づけ

〈3. 死因・喪失前後の感情〉

Q12. ペットの喪失原因、Q13. ペットの最後を看取れたか

〈4. モーニング可能な条件〉

Q14. 働きかけの方向と内容

〈5. 喪失後の感情〉

Q15. ロス後の感情、Q16. 悲しみへの反応、Q17. 死後のペットの位置づけ、Q18. ペットの死後の変化

〈6. 未来について〉

Q19. この先ペットを飼いたいのか、Q20. 子どもにペットを飼わせたいか、その際ペットに何を期待するか、Q21. 心の支えになったもの、Q22. ペットから受け取ったもの、Q23. 今どのような絆があるか、の23項目である。紙面の都合上、本稿では前半部〈1. 回顧〉〈2. ペットとの関係〉を報告する。

4. 分析方法

予め設定した調査概念に基づき質問を構成し、インタビューで得られた語りをとりあげ、発言の内容を文章データに起こし、質的に分析した。まず、ペットとの思い出を回顧してもらい、喪失前後の感情の変化、モーニングワーク可能な条件、喪失後の感情、未来に向けての死の受容、ペットから受け取ったもの、など、悲哀の過程に着目して分析を行った。協力者には、質問項目に沿って回答者主導でなるべく自由に回答してもらった。例えば分析中に出現する、積極的か消極的か、の判別は筆者が行うのではなく、自身の判断に任せ、その関わりをどうとらえているかに注目した。

IV. 結果

〈1. 回顧〉まず、調査の導入として、対象となるペットについて関係の始まりから回顧し、ペッ

トとの生活を振り返ってもらった。

Q3. 飼育期間

まず、当該ペットの生存期間を尋ねた。回答者のペットの生存期間と飼育期間は等しい(表_2参照)。生存期間の平均は12.07年だが、9名中7名が13年以上の生存期間であった。犬の寿命は、体が大きいほど平均寿命が短く、小型になるほど長くなる傾向があると言われているが、ペットの保険サービスを扱うアニコム損害保険株式会社(2016)は、犬の平均寿命は13.7歳であるという調査結果を出している。このことから本調査協力者のペットらは、比較的寿命を全うしていた、または長寿ペットであると言える。そして飼い主とペットが長期間の付き合いであったことが分かる。

表_2 生存期間、死後から回想までの期間、他のペットの有無

	性別	年齢	生存期間	対象	死後から回想までの期間	他のペットの有無
Aさん	女	49	15年5ヶ月	犬	4ヶ月	有(犬猫多数。保護犬など23頭)
Bさん	女	49	11年1ヶ月	犬	3年5ヶ月	無
Cさん	女	49	15年5ヶ月	犬	4ヶ月	無
Dさん	女	49	4年3か月	犬	15年8ヶ月	有(犬2頭猫1頭)
Eさん	女	55	14年	犬	6ヶ月	無
Fさん	男	49	15年4ヶ月	犬	7ヶ月	有(犬1)
Gさん	男	29	15年4ヶ月	犬	7ヶ月	有(犬1)
Hさん	女	51	4年10ヶ月	猫	1ヶ月	有(犬2)
Iさん	女	42	13年	犬	1ヶ月	有(犬1)

Q4. 死後から回想時までの期間

ペットの死後から、本研究のインタビューを受けた時点の期間は、短い者で死後1ヶ月、長い者で15年8か月とばらつきがあった(表_2参照)。死後から回想までの期間の違いは、想起される記憶や吐露される感情の違いにつながる恐れもあり、次の調査では、十分に検討しなければならない項目である。

Q5. 他のペットの有無

ペットを喪失した時点で他のペットを飼っているかどうかの質問には、9名中半数以上の6名が有り、3名が無し、との回答であった(表_2参照)。いわゆる多頭飼いの人が多く、対象者らは動物好きであると読み取れる。中には動物愛護の観点から保護動物を23頭所有している人もいた。何頭か飼っているペットの中の1ペットの死について語ったことになる。

Q6. 飼い始めるきっかけ

どのような経緯で飼い始めるようになったかを尋ねた。また、その際に自分が飼いたく飼ったペットか(積極的)仕方なく飼ったペットだったか(消極的)を尋ねた。積極的か消極的かの判定は、そのどちらにあたるかを本人に判断してもらった(表_3参照)。9名中6名が積極的に飼育し始めたとの回答であった。たまたまペットショップで出会った、先住犬の可愛さに魅了されたためもう1頭欲しくなった、先住犬が死んだとたん家の中が暗くなり明るさを取り戻すために飼った、ずっと憧れていた犬種だった、自分より夫の方が積極的だったが悩んだ末飼うことを決めた時にたまたま心惹かれる犬と出会った、そもそもずっと飼いたかった、といった回答であった。消極的飼育から始まった回答者たちは、もう少し二人きりがよかったがパートナーが望んだために仕方なく、自分より先にパートナーが飼っていたため(連れ子のような)、野良猫を息子が拾い飼いたいとせがんだため仕方なく、

など家族の呼びかけがきっかけであった。「可愛くて」「小さくて」「犬が大好き」など、そもそも全体的に動物が好きという背景があるが、Cさんの「家庭の中を明るくするため」、との回答は注目に値する。ペットが人のコミュニケーションの媒介要因であり、影響を与えていることが伺われる。朝比奈（2002）の調査でも、家族の反対にあいつつ飼い始めたペットでも家庭内に次第に馴染んでいった、との報告があり、本調査でもペットを拒絶した飼育はなかった。回答の詳細は巻末の付録を参照されたい（付録_1）。

表_3 ペットを飼い始めるきっかけ

Aさん	積極的	たまたま入ったペットショップでかわいい子がいた。家族でよく相談し飼った
Bさん	積極的	先住犬が大好きだったので、もう一匹同じ犬種がほしくなった
Cさん	積極的	先住犬が死に家の中の火が消えたようになり、明るくしたかったのでブリーダーからもらった
Dさん	積極的	家族みんなが犬好きだったため
Eさん	積極的	元夫に犬を飼うのが夢だと言われたのがきっかけ。悩んだ末心惹かれる子がペットショップにいた
Fさん	消極的	最初のパートナーが、飼いたいと言いだした。ペットショップにたまたま欲しい種類の毛色の子がいた。積極的に買いたいとは思わなかった
Gさん	消極的	パートナーが以前から飼っていた。だんだんと世話にも参加するようになっていった
Hさん	消極的	庭に迷い込んできた。息子にせがまれ飼うことになった
Iさん	積極的	ずっと犬を飼いたかった

Q7. これまでの飼育経験

表_4は、これまでのペット飼育経験を尋ねたものである。9名中4名が有り、5名が無しの回答であり、ほぼ半数で飼育経験有りとし分けられた。しかしこの飼育経験の有無は、「当該ペットと同種のペットの飼育経験」との意味で回答されており、例えば、猫は過去に飼ったことがあるが、死んだペットは犬、だとすると飼育経験は無と回答している。そこから、これまでペットの飼育が全く初めであるのは3名であった。回答者のほとんどが過去において継続的または断続的にペットの飼育経験があった。その回答者たちにおいては今回のペット喪失はこれまでの人生で何度目かのペット死別体験があることを意味している（付録_2）。

表_4 ペットの飼育経験

Aさん	有	小4の時、実家で犬を飼っていた
Bさん	有	幼少時よりずっと継続して犬がいる生活
Cさん	有	高校時代から犬を飼っていた
Dさん	有	幼稚園時代、小学生時代、中学生時代を通して継続的に犬がいる生活
Eさん	無	パートナーともない
Fさん	無	猫は飼ったことがあったが、犬を飼うことは初めて
Gさん	無	ペットは飼育したことがない
Hさん	無	小さいころからずっと犬が傍にいた。猫は飼ったことがなかった
Iさん	無	人生で初めて犬を飼った

Q8. 世話における関わり

ペット関与の主体性を調べるために、積極的か消極的かでペットの世話における関わりを尋ねた。9名中8名が積極的な関わりである、と答えた（表_5参照）。

表_5 世話における関わり

Aさん	積極的	うんちと食事の繰り返し。お散歩はあまり出ていかなかった
Bさん	積極的	世話は自分がやっていた。散歩に行きご飯は2回
Cさん	積極的	自分。食事、散歩、トイレの世話。世話は自分の役目
Dさん	積極的	同居ではなかったため、日常の世話は両親、実家に帰れば自分
Eさん	積極的	私も元夫もお世話をしていたが、自分の方がご飯をあげたりお散歩する機会は多かった
Fさん	積極的	最初は消極的であったが、次第に飼育に参加するようになり積極的へ変化した。一緒に暮らす様になり、餌やりや散歩、トリミング、トイレ掃除などお互い時間のある時にやるような感じになった。その後、全ての世話をするようになった
Gさん	消極的	当初は積極的な関わりを持つとは思っていなかった。パートナーの家に行く機会が増えて、徐々に食事や散歩を手伝うようになり「二人で飼っている」という意識になっていった
Hさん	積極的	主に私と父が行っていた。他やってくれる人がいなかったのでトイレの掃除は主に私がやるしかなかった
Iさん	積極的	自分の犬という意識なので大体の世話は全てやっていた。たまに仕事の時などに実家に預けていた

世話の内容は餌やり、散歩、トイレ、などペットの生活の中心的なものである。積極的に世話をしたのは「自分」である、「自分」が主体的な関わりをしてきた、という主張的な回答がほぼ全員に聞かれた。消極的と回答した1名も、ペットとの接触頻度が増すにつれて世話する意識も高まっていった様子が伺われ、ペットと生活を共にすることで愛着や責任感が形成されるのではないかと考えられる(付録_3)。

Q9. ペットのキャラクター把握

ペットの特徴把握として、美点、欠点を尋ねた。美点については、主に容姿、性格、行動、飼い主の感触、の観点で多く語られていた(表_6参照)。容姿については、顔が小さく整っている、見た目が美しい、美形、ビー玉のような綺麗な目、チャーミングなしっぽ、などであった。性格については、おとなしい、従順、けなげ、嘘をつかない、一生懸命、優しい、強い、守ってくれる、賢い、凛々しい、かっこいい、おっとりしている、人懐っこい、焼きもちを焼かない、理解が良い、孤高、落ち着いたのある、愛想がよい、可愛がられる、前に出ない、外面がよい、おとなしい、などが挙げられた。行動は、粗相をしない、無駄吠えしない、ゴキブリを取る、悲しみの時に寄り添ってくれる、帰宅時の出迎え、添い寝、来客者に挨拶する、などであった。飼い主の感触では、匂いを嗅ぐのが好き、ふわふわしている、ふかふかのお腹、であった。美しさや望ましい性質、行動傾向、さらに飼い主にとって触ったり、匂いを嗅いだりして好ましいと思われる特徴が美点とされていた。見た目の良さ、飼いやすさとしてのペットの性格、飼い主にとって匂ったり触ったりして得られる心地よさ、などが美点と捉えられている。ペット個体としての特徴と、飼い主にとって快樂を得られるか、がポイントだと考えられる。

欠点については、マーキングや食糞、咬み癖、拾い食い、物を破壊する、などが挙げられた。匂い、鳴き声、毛の問題などはいわゆる犬の問題行動として一般的に聞かれるものである。ペットの好き嫌い、飼養の有無にかかわらず、人間にとってこれらは不快と認識されている。しかしこれは飼養する側のトレーニングによっては改善するものである。欧米圏と比較して日本はペットの飼養方法の認識が未だ十分とは言えず、ペットと人間、双方が快適に暮らせるための、適切な飼養方法の普及が望まれる(付録_4参照)。

表_6 ペットのキャラクター把握

美点	容姿	顔が小さく整っている 見た目が美しい 美形 凛々しい かつこい ビー玉のような綺麗な目 チャーミングなしっぽ 金色の毛で美しい
	性格	おとなしい 従順 けなげ 嘘をつかない 一生懸命 優しい 強い 守ってくれる 賢い おっとりしている 人懐っこい 焼きもちを焼かない 人間のことを理解する 孤高 落ち着きのある なんでもお見通しのような 愛想がよい 可愛がられる 前に出ない 外面がよい
	行動	粗相をしない 無駄吠えない めったに吠えない ゴキブリを取る 悲しみの時に寄り添ってくれる 帰宅時の出迎え 添い寝 来客者に挨拶する
	快楽	匂いを嗅ぐのが好き ふわふわしている ふかふかのお腹
欠点	問題行動	マーキング 食糞 咬み癖 拾い食い 物を破壊する

〈2. ペットとの関係〉回答者とペットとの関係、家族の中でのペットの存在や位置づけを尋ねた。
Q10. ペットとの関係

ペットとの関係について、回答者本人から見たペット、またペットから本人はどう見えていたと思うか、を尋ねた(表_7参照)。回答者本人とペットの関係ではほとんどが子どものようだと回答している。多頭飼いをしている場合は、その他のペットの中で順位をつけ、長女、長男と認識している。また子どもと答えた回答者は同様にペットから見た自分は、母親、父親である、と答えている。

表_7 ペットとの関係

	本人から見たペット	ペットから見た本人
Aさん	子ども、長女	母親
Bさん	子どものような存在	子どもを見守ってくれた
Cさん	子ども	母
Dさん	子どものような、兄弟のような	母のような、姉のような
Eさん	大切な人生の相棒	おそらく同じように人生の相棒と思っていたはず
Fさん	家族の一員 子どものような存在 長男	ご飯をくれる人、ボス
Gさん	忘れ形見	パパと仲がいい人、継母
Hさん	猫 ペット 動物	同居人 甘えれば喜んで撫でてくれる人
Iさん	息子	母

Dさんは「子どものようでもあり兄弟のようでもある」と回答をしていた。Dさんの場合は実家を離れて暮らしていたため日常の世話の中心は自分以外の家族であった。ペットの傍にいるときは自分が世話の中心者であったことから、世話役割が中心の場合は親子関係のように、周辺的の場合は兄弟のようにと感じていたのではないかと推察される。そこから、トイレや餌やりなどの生活の中心となる世話を積極的に行うことは、親の養育態度を想起させるものであり、その結果ペットを子どもの様に感じてしまうのではないかと推察される。またHさんのみが猫の飼い主であり、ペットはペットであると回答している。ペットの種類が影響しているかは今回の結果からは明らかではないが、次回の課題としたい(付録_5参照)。

Q11. 家族にとってのペットの位置づけ

次に、家族の中でペットはどのような存在であり、位置づけであったのかを尋ねた (表_8 参照)。

表_8 家族にとってのペットの位置づけ

Aさん	特別 長女 大きな存在 ポス
Bさん	癒し
Cさん	アイドル 癒し(間抜けなところに笑いが出る)
Dさん	アイドル 可愛い 癒し 愛情をかける対象 大好き
Eさん	癒やし 元気の源 愛を教えてくれた存在
Fさん	家族の一員 パートナーとの間を取り持つ存在
Gさん	かすがい
Hさん	家族のトラブルのある所に来て黙っている 緩衝材
Iさん	皆が愛する子

その結果、癒し、家族の一員、子、かすがい、といった回答が見られた。Hさんは「家族のトラブルのある所に来て、黙っている。その存在にはっと我に返ることもあった。騒がないけど、静かにその存在があった。緩衝材のような役割」としている。また、かすがいとは、「子は鎧」の諺にもあるように、子が夫婦間の縁を保つかのごとくペットの存在とは人間関係をつなぎとめる、またはトラブルの際には緩衝材のような役割をしている、と捉えられている。松田 (2018) では、ペットをかけがえのない存在だから家族と感ずるとしており、癒しや元気を与えてくれる、小さくて愛らしいペットの存在は子どものものであり、十分家族の一員として認められているのである (付録_6 参照)。

V. 考察

本研究ではペットを喪失した人を対象に、インタビュー調査からペット喪失後の感情を分析した。まず本報告では前半部の調査の導入として死別したペットの生まれてから死ぬまでを回顧してもらい、ペットと飼い主との関係の語りから詳細に検討した。今回の対象者のペットらは平均余命を超えたペットが多く、大切に飼育されていたことが伺える。同時に過去において継続的・断続的に飼育経験があり、また他のペットも飼育しているなど、特にペットに愛着を持っていた人たちといえる。

朝比奈 (2002) の調査では、インタビュー協力者 (大学生) のペットの世話の傾向は気が向いたときに行う、または散歩や遊び、など周辺のなものでありペットの世話の中心は両親、特に母親である、とされていた。それに対し本件の調査では、対象者はペットの世話を全面的に行うなどペットとの関係で中心的役割を担っていた。これら世話における主体性の違いは対象者の年齢によるものであろう。本研究は、壮年期 (40~50代) と呼ばれる年代を対象とした調査であり、これらは一般的に親世代に属する人たちである。ペットと自分の関係を「子どもと親」と例えたことが示すように、あたかも自分の子どもの世話をするが如く、食事、散歩、トイレの世話を中心となっていくことでペットと関わりを持っている。それはまるで親が子どもの養育をすることと似ており、それゆえ、ペットは子ども、との認識を持つと考えられる。調査協力者は既婚、未婚、子どもなし、など様々であったが、いずれもペットは「子ども」としていた。それは実生活上の役割に係らず、世代性としての立場や役割の表れだと解釈できる。

また、家族の中での位置づけとしては、癒し、かすがいである、との回答が得られた。時に自分の気分をなだめてくれるもの、時に人間関係の橋渡し、家庭内を明るくしコミュニケーションのきっかけとなる存在、として感じていた。これらが「ペットは家族」と感じる人が多いことの原因であろう。

本研究が何らかの役割を果たしたとすれば、インタビューに協力いただいた方がペットとの関係を振り返り、感情を吐露することにより、気持ちのまとめ作業ができたのではないかとということである。

「たかがペットの死」という批判的な言葉に出くわさないためには、他人にとってはほんの小さなこの死を隠さなければならない場合もある。人間とペットの内的な関係を明らかにすることは、現代日本の家族の様態にも迫る可能性があるのではないか（松田，2016）。これら周辺的な基礎研究の積み重ねが今後の重要課題の一助になることを願いたい。

参考文献

- 安藤孝敏（2015）ペットと死別した高齢者の適応を支えたもの：死別したペットとのContinuing Bondに着目して，技術マネジメント研究（149），pp13-22，横浜国立大学技術マネジメント研究学会
- アニコム損害保険株式会社（2016）犬種別の平均寿命を調査
https://www.anicom-sompo.co.jp/news/2016/news_0160531.html
- 朝比奈千絵（2002）青少年期における飼育動物の喪失（ペットロス）体験に関する探索的研究，教育臨床心理学研究：紀要（5），pp181-194，北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ
- Belk, R.W. (1988) Possessions and the extended self *Journal of Consumer Research*, 15, pp139-168
- Bowlby, J. (1980) *Loss: Sadness And Depression (Attachment and Loss)*, Basic Books
- Deeken, A. (2003) よく生きよく笑いよき死と出会う，新潮社
- E・キューブラー・ロス 鈴木晶訳（1998），死ぬ瞬間 死とその瞬間について，読売新聞社
- 遠藤利彦（1997）悲しみとは何か？悲しみはいかに発達するか？，松井豊（編）悲嘆の心理，pp9-5，サイエンス社
- Freud, S. (1970) 悲哀とメランコリー，井村恒郎・小此木圭吾（訳），フロイト著作集6所収，pp137-14，人文書院
- 濱野佐代子（2008）幼児の動物の死の概念と，ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究—幼児の死の概念とペットロス経験の関連—，*Human Developmental Research Vol.22*, pp23-26
- 平山正実（1997）死別体験者の悲嘆について，松井豊（編）悲嘆の心理，pp85-112，サイエンス社
- 池内裕美・中里直樹・藤原武弘（2001）大学生の対象喪失—喪失感情，対処行動，性格特性の関連性の検討—，*社会学部紀要 第90号*，pp117-131
- 松原崇・城仁士（2002）犬の飼育が中高年期にもたらす意義，*神戸大学発達科学部研究紀要10(1)*，pp161-16，神戸大学発達科学部研究紀要
- 松田光恵（2016）ペットは家族とみなせるか（1）—家族概念と主観的家族についての検討—，*くらしき作陽大学作陽音楽短期大学研究紀要 第49巻 第1号*，pp1-11
- 松田光恵（2017）ペットは家族とみなせるか（2）—飼育経験の有無が与える影響—，*くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要 第50巻第1号第2号合併号*，pp1-16
- Miller, E. D., & Omarzu, J. H. (1998) New directions in loss research, In Harvey, J. H. (Ed.), *Perspective on loss*
- 森昇二（1990）子どもの対象喪失—その悲しみの世界—，創元社
- 森昇二（1993）「別れ」の深層心理，培風館
- 小此木圭吾（1979）対象喪失—悲しむということ—，中公新書
- 小此木圭吾（1991）対象喪失と悲哀の仕事，*精神分析研究*, 34(5)，pp294-322
- 小此木圭吾（1995）思春期・青年期における Mourning とその病理，*思春期青年期精神医学* 1, Vol. 5, No 1
- 小此木圭吾（1997）対象喪失とモーニング・ワーク，松井豊（編）悲嘆の心理，pp113-134，サイエンス社
- Rando, T. A. (1988) *Grieving: How to go on living when someone you love die*, Lexington, MA: Lexington Books

高木慶子 (2007) 喪失体験と悲嘆, 医学書院

山本力 (2014) 喪失と悲嘆の心理臨床学, 誠信書房

付録

付録_1 ペットを飼い始めるきっかけ

Aさん	積極的	池袋の商店街のペットショップにいた。犬を飼おうと思って行ったわけではなく、飼い猫の毛を取るためのグッズを買いにたまたま入った。花がそこにいた。可愛くて、小さくて、店員に出してもらった(当時4か月)。一度家に帰り、主人と相談した。再び二人で見に行ったら。実母に買ってもらった。とてもいい子で全く鳴かない子だった。バッグの中に入れてよく連れまわった。
Bさん	積極的	先住犬のはな(プリーダーの写真をネットでみつけ飼う)がかわいくて、大好きになったので、もう一匹ダックスが飼いたくなった。
Cさん	積極的	実家で飼っていたシェルティが亡くなった。火が消えたようになった。亡くなったときに結婚した。家を明るくしようと思った。シェルティに顔が似ているMダックスを飼い始めるが、すぐ死んでしまった。そのうちに実母も死亡。実家がボロボロになった。明るくしようとプリーダーからカプリをもらう。
Dさん	積極的	実家が転居。もともと家族みんなが犬好きで最後の犬から犬を飼っていない状態が続いたので、そろそろ犬がいる生活がよかった。自分がたれ耳、ふわふわ毛の犬が好きで、ゴールデンを飼ってみたかった。名前は先代犬と同じになった(母が決めた)。
Eさん	積極的	結婚5年後くらいに、元夫に、いつか犬を飼うのが夢なんだと言われたのがきっかけ。自分は小さい頃から、おじいちゃんや友だちの家で犬猫にいい印象がなかったの、本気じゃないと思ひ、そうなんだとやり過ごしていた。でも、江古田に引っ越したら徒歩3分の所にペットのコジマがあり、それから、しよちゅうそこに通っていた。そして2年くらい経った頃、なぜか心引かれる子がいて抱かせてもらった。でもその時ももう少し時間がほしいと言ひ、本当に自分に飼えるのか、更に1週間悩んだ。そして数日後に会いに行ったら、価格が3万円ほど値下がりして驚いたが、既に飼おうと思ひだったので、迷いなく家族となった。余談だが、コジマの段ボールに入れてこられたとろんは、私たちがケージを組み立てている間に待ちきれずに、段ボールのバッグをぶち破って出てきた。そういう元気な女の子だった。
Fさん	消極的	最初のパートナーが、飼いたいと言ったので パートナーの職場の近所のペットショップにたまたま欲しい種類の毛色の子がいたので迎え入れた。散歩をさせる必要があるので積極的に買いたいとは思ひなかつた。最初のパートナーと付き合い始めて日が浅かつた(1年ほど)ので二人の時間を楽しみたいと思ひた。
Gさん	消極的	パートナーが以前から飼っていた。最初は触らせてもらう程度だったが、だんだんと世話にも参加するようになっていった。自分がこじろうと一緒にいたのは亡くなるまでの2年半ほどになる。
Hさん	消極的	庭に迷い込んできた。母野良猫に育児放棄されたようで、目やにで目が開かなくなっていた。お腹を空かせていたのかニャーニャー泣いて母ネコをさがしているようだった。見かねた息子に「可愛そうだから病院に連れて行って」とせがまれ、とりあえず動物病院へ行った。先に犬が2匹いたので、飼う気はなかつたが、獣医からも「一度手を出したらもう野良には戻れない」と言われ、捨てるわけにもいかず、飼うことになった。もともと猫は飼ってみたかったのでそのうちにその気になった。
Iさん	積極的	ずっと犬を飼いたかつたので

付録_2 ペットの飼育経験

Aさん	有	小4の時、実家でスコッチテリアを飼った一面倒が見切れず、よそにもらわれていった。亡くなった主人が動物好きだったので花を飼い始めた。そうでなければ自分から犬を飼おうとは思ひなかつた。
Bさん	有	幼少時よりずっと継続して犬がいる生活。家族も犬が大好きだった。小学生の時、マルチーズ、大学生の時ポメラニアンを飼っていた。
Cさん	有	シェルティ(チャンプ)高校時代から飼っていた。
Dさん	有	幼稚園時代、柴犬:ロリー・小学生時代、紀州犬:白・中学生時代、雑種:ライダー(13歳で死亡)。
Eさん	無	パートナーともなし。
Fさん	無	猫は、飼ったことがあつたが、犬を飼うことは、初めて。
Gさん	無	ペットは飼育したことがない。
Hさん	無	小さいころからずっと犬が傍にいた。猫は飼ったことがなかつた。父親が「猫は嫌い」と言っていたこともあるかもしれない。ぼおを飼うときも反対された。大学生くらいの時から、猫を飼ってみたい、と思ひていたが、犬がいたために現実に飼うとは思ひてなかつた。飼いだすとそのかわいさに魅了された。
Iさん	無	人生で初めて犬を飼った。

付録_3 世話における関わり

Aさん	積極的	うちを取る→食事→うち→食事…の繰り返し。お散歩はあまり出ていかなかった。
Bさん	積極的	さすけ(はなも)のお世話は自分がやっていた。散歩についてご飯は2回。生後4か月で飼い、7か月の時にNYに転勤になった。NYは日本より生活しやすく、コンクリートが多いので歩かせやすかったし、店やデパートでも犬連れで入れた。引っ越したばかりのNYでは知り合いもいないし、子どももいなかった。犬を連れてしていると話しかけられ、人付き合いもできた。犬たちがいろいろな人と引き合わせてくれた。
Cさん	積極的	自分。食事、散歩、トイレの世話。主婦なので家にいる時間が多く、必然的に世話は自分の役目。
Dさん	積極的	同居ではなかったため、日常の世話は両親、実家に帰れば自分。ライダーに会えることを楽しみに生活していた。雑誌を何冊も買い、ゴールデンの研究をした。散歩にもよく連れて行ったり、一緒にお出かけもした。
Eさん	積極的	ほぼ同じくらい、私も元夫もお世話をしていたが、自分の方がご飯をあげたりお散歩する機会は多かったと思う。子犬の頃は元夫もつけなどしてくれましたが、成犬になってから、特にここ数年は自分の方が何かと世話をすることが多かったように思う。
Fさん	積極的	最初は消極的であったが、次第に飼育に参加するようになり積極的へ変化した。パートナーと付き合い始めのうちは、別々に暮らしていて相手の家で飼っていたので週末に散歩させたり遊ぶだけだったので世話らしいことは、殆どしていなかったが、一緒に暮らす様になり、餌やりや散歩、トリミング、トイレ掃除などお互い時間のある時にやるような感じになった。その後、最初のパートナーが亡くなったので全ての世話をするようになった。
Gさん	消極的	当初は、「パートナーのペット」として捉えていたこと、自分がそれまで動物に好かれたことがなかったので、積極的な関わりを持つとは思っていなかった。パートナーの家に行く機会が増えて、徐々に食事や散歩を手伝うようになり「二人で飼っている」という意識になっていっ
Hさん	積極的	主に私と父が行っていた。息子は小さかったのでできなかった。母は猫好きを公言する割には餌やりなど自分の好きなことしかしない。トイレの掃除は主に私がやるしかなかった。ブロッコリーが大好きで、ゆでていると必ず傍に来ていた。いつもおすそわけのブロッコリーを台所で食べていた。今でもブロッコリーの茹でるにおいをかぐとぼおが傍に来ているような気がする。
Iさん	積極的	自分の犬という意識なので大体の世話は全てやっていた。たまに仕事の時などに実家に預けていた。

付録_4 ペットのキャラクター把握

	美点	欠点
Aさん	全部が美点。鳴かない、バッグの中でもおとなしい、おしっこは我慢して粗相はしない。顔が小さく整っている。	マーキング。
Bさん	愛想がいい。従順。愛想がいい。誰にでも懐く	食いしん坊。
Cさん	けなげ、嘘をつかない。いつも一生懸命。見た目が美しい。脇が金色の毛で、匂いをかぐのが好きだった。	おしっこはずす。
Dさん	優しい、強い。守ってくれているような感覚。賢い。ふわふわ。凛々しい。かっこいい。	病気がちだった
Eさん	他のわんこに吠えられても吠え返すこともなく、スタスタと通り過ぎるような子で、無駄吠えもしない、本当に吠えないおっとりした子だった。コンビニなどで外に繋いでおいたり外を歩いている時など、声をかけてもらったり可愛がられることがとても多く、本当に人なつっこくて優しい子だった。また、私たちが他のワンコを可愛がっても、焼きもちを焼かない子だった。	ゴミ箱を漁る。何でも食べたがる。ティッシュが好きで食べてしまう。
Fさん	美形。比較的いうことを理解しているようだった。	当てション 食糞 老年期の夜鳴き
Gさん	家庭の中ではよく「孤高だね」と話していた。小型犬の割には、落ち着いた性格をしていた。	盗み食い(彼が届く場所に食べ物を置いていた私も悪いが…) 若いわんこを付け回すこと。
Hさん	ゴキブリを取ってくれた。悲しみの傍にすつときて、黙って寄り添う。なんでも見通しているような大きなビー玉みたいなきれいな目。フカフカのお腹。鍵型に曲がったチャーミングな尻尾。帰宅したらすりよってお出迎えしてくれる。膝に乗ってくる。食事や新聞、パソコンをしている時には必ず邪魔をする。そばに来て寝てくれる。初めての人でも愛想がよく、必ず挨拶に行っていた。みんなから可愛がられていた。	色々なものを破壊した。障子や柱、壁紙、カーテン。逃走癖があり、常にどこかから外に出られないか、様子をうかがっていたのでこちらも気が抜けなかった。気が強く、よく噛まれていたが、それも大きくなるとだんだんと甘噛みになった。
Iさん	前に出ない、おとなしいところ。外面がものすごくいい。一度言えばやらない。	寝ている時に触るなどすると噛みつく。それだけは治らなかった。

付録_5 ペットとの関係

本人から見たペット	ペットから見た本人
子ども、長女(他にも動物がいる)	母親(花は他とは違う存在)
従順 癒し 子どものような存在 実子が生まれたあともそれは変わらなかった	興味津々 子どもを見守ってくれた
子ども	母
子どものような、兄弟のような	母のような、姉のような
大切な人生の相棒	ベタベタ甘えるのではなく、飼い主に似たのか割と我が道を行くタイプの子だったので、おそらく同じように人生の相棒と思っていたはず
家族の一員 子どものような存在(途中からもう1匹迎えたので長男)	ご飯をくれる人、ボス
忘れ形見(もともとはパートナーが以前同居していた方(故人)が育てていた)	パパと仲がいい人、継母
猫 ペット 動物	同居人。甘えれば喜んで撫でてくれる人
息子みたいな感じ	母みたいな感じだったと思う

付録_6 家族にとってのペットの位置づけ

Aさん	一番、特別、長女、花という大きな存在、ボス
Bさん	癒し。誰にでもおなかを見せる。今考えると本人は色々我慢していたのかもしれない。
Cさん	アイドル、癒し。笑い、間抜けなところ(ドアに挟まって動けない、カーテンに絡まって困り果てる)
Dさん	アイドル。可愛い。癒し。愛情をかける対象。大好き。
Eさん	癒やしであり元気の源。愛とはどういうことかを教えてくれた存在。
Fさん	家族の一員 パートナーとの間を取り持つ存在
Gさん	自分とパートナーが喧嘩をしていると、二人の表情を見て不安がるので、この子のためにもちゃんと話し合っって仲直りしようと思えた。 子はかすがい、という言葉がいちばん近いような気がする。
Hさん	息子と母にとっては特別な存在だったかも。小さいころはよくかみつかれていた。大きくなって、ふと気づくと、家族のトラブルのある所に来て、黙ってみている。その存在にはっと我に返ることもあった。騒がないけど、静かにその存在があった。緩衝材のような役割
Iさん	両親は家の中で飼うのは反対だったがすごくかわいがった。夫も飼い始めから大好きなので、皆が愛する子だった

